

歳を越した今もかくしゃくとしてご研究に専念され、そして私にあのきびしい苦言を下された心優しい祐子夫人も当時の上品な美しさをそのまま残して、健やかに暮らしておられる。(岩波書店「図書」12月号、20-23頁、1995)

「蔵書焼失」

亡父の三十五日祭をすませた昨年(1979年)7月21日、第10回国際植物成長物質会議に出席するため、何か気がかりのまま私はアメリカへ出発した。祭壇の線香が原因で出火し、留守宅が全焼した、という知らせを受けたのは会議第2日目、7月24日の夕刻であった。国際電話のやりとりで、とに角わかったのは、家族が無事であったこと、類焼がなかったこと、ガレージと車を除き、家屋家財を全焼したことであった。会議中の私の任務がすべて終わったわけではなかったが、主催者側であるウイスコンシン大学のスーク教授ら、あるいは他の日本人出席者らの強いすすめがあったので、会期2日を残し、私は7月26日早朝、マジソンを発ち、飛行機を乗り継いで27日夜、大阪に帰った。

焼けあとを目の当りにしたときの情けない気持ちは今でも忘れられない。私は少年時代、家財のすべてを残し、リュックサック一つで旧満州から引き揚げた経験をもつが、国が敗れ、日本人全部が裸になった終戦当時のことで、引き揚げの体験はとくに辛い思い出というほどではない。すべて焼けてしまった今度の火災は予期しなかった出来事であり、実にいまいまして、そして憂うつであった。ことに棚に真っ黒になって並んでいる本やレコードアルバムの惨憺たる有様は今思い出してもぞっとする。

私の蔵書は大別すると、一・単行本(和、洋専門書、辞書類および一般書)、二・専門雑誌(大部分は製本したもの)、三・論文別冊、であった。これら私物の蔵書を置くほど研究室は広くなく、また私はデスクワークは自宅でする習慣なので、蔵書の大部分を自宅においていた。このうち、一と二は書斎の木製書棚に並べていたが、数がふえたので、ちょうど火災のおこる二か月ほど前、廊下にスチールアングルを組み、幅約三メートルにわたって天井までの書棚を作らせた。この廊下の書棚には雑誌と、書斎に常時おく必要のない書籍を並べた。埃よけにつけたカーテンが不燃性でない安物の化繊だったのもまずかった。

焼けた家はカギ形をした鉄骨、コンクリートブロックの二階建てであった。奥の仏間にしていた和室から出火したが、火は壁の外へ拡がらず、隣近所へ被害が及ばなかったのは幸であった。そのかわり夏のことで、窓は開けており、火は廊下を通り、階段を煙突を通るかのようになり、二階まで昇り、短時間で家の内部を燃やしつくしたらしい。このため、火の通り路になった廊下の書棚の運命はいうまでもない。

この火災の被害は三つに分けられる。一つはもちろんのこと火と熱である。二つ目は新建材などの燃焼による煤、三つ目は消防の放水による浸水の被害で、夏場だったため、あとで残った本の頁の間にカビが発生して困った。

私は本が焼けた、と書いたが、実は本はなかなか燃えないものだというのをこの火災で認識したわけである。書棚に並んだ本の背は無残に焼けたが、酸素不足で中まで火が通らず、頁は意外な程無事なものが多かった。ただし、火や熱は上にあがるため、書棚の天井近くにおい

た本はほとんど完全に燃えてしまっていた。しかし、デスクの高さから下のほうにおいていた書籍の多くは再製本可能で、再び蔵書として手元に残すことができたので大いに助かった。

単行本、雑誌のうち、アート紙を用いているものの水による被害は極めて大きかった。ちょうど木の板のようにカチカチに固まり、手の施しようがなかった。私はヨーロッパのある専門雑誌のバックナンバーを揃えて大切にしていた。この雑誌も数年前から全頁アート紙を使用しはじめていた。私がこの雑誌を大切にしていたことを知っていた大学院学生の息子は火災直後、彼の友人たちの協力をえて、水をかぶった焼け残りの各巻ページ一枚ごと新聞紙を挟んでおいてくれた。こうして水気を除いたものはアート紙のものもすべて助かり、あとで製本し直すことができた。

いちばん無事だったのは論文別刷類であった。これら世界各国の研究者から寄贈された別刷類がほとんど無傷で助かったので、火災による私の研究上、執筆上の支障が最小限に止まったのは不幸中の幸であった。私の約七千部に及ぶ別刷類は四段のスチールキャビネット三台に納めてあったが、煤が入った程度で、ほとんどすべて無事であった。

こうして、家財全焼という目にあったが、私にとってもっとも大切な論文別刷、蔵書類のかなりの部分が助かった。たとえば、1881年刊のダーウインの名著“The Power of Movement in Plants”（植物における運動の力）は植物ホルモンの発見の基礎になった研究をまとめたものである。この本にはカナリアソウの芽生えの光屈性現象や、植物の回旋転頭運動がくわしく記載されており、世界ではじめての植物成長運動生理学モノグラフといえる本である。この本のオリジナルはことによると日本でも古い大学の図書館にはあるかもしれないが、私は倉敷の岡山大学農業生物研究所のペファー文庫で手にしたことがあるだけであった。近代植物生理学の創設者といわれ、日本など世界各国の植物学者が十九世紀から二十世紀にかけて師事したライプチヒ大学のペファー（Wilhelm Pfeffer）の蔵書が現在、同研究所に納められている。その中にこのダーウインの名著もあり、本の扉にインクの薄くなったダーウインの署名と献辞が今でもみられる。百年前に刊行され、私のものになったこの名著は過年、畏友S授がシアトルの古本屋で発見し、贈ってくれたものである。背は焼けたがこの本は無事であった。焼けた背をこちらに向けて書架に並んでいる姿は、激しい戦闘に参加して、凱旋した将を思わせる威風がある。

この火災で国内外の先輩、友人の方々に心配をかけ、日用品のほか、貴重な書籍やレコードを多数頂戴した。また、多くの出版社からも図書の寄贈を得た。

内外の友人が贈ってくれた本の中には私が火災前にもっていなかった貴重なものもある。たとえばスイスの友人P教授のくれた本の中には1857年発行のドカンドルの植物学入門（M. A. de Candolle: Introduction de la Botanique）なども入っている。これなど、今日お金を出して求められるというものではない。改めて先輩、知人、友人の暖かい友情を強く感じたわけである。私は火災の経験から、火には絶対的に気をつけること、書籍の購入は必要最小限にすること、重要な蔵書はスチール書棚に納めることの三つを新たな決意とした。しかし、喉元過ぎれば、文字通り熱さ忘れる、で、一年もたつて気がついてみると、以前と同じように次々と本を買い、新築した家で書棚の工面をするという状態になっている。（岩波書店「図書」12月号、43-45頁、1980）